

ニッポンの福祉を救う

今、我が国の名士たちが異口同音に「日本はもう駄目だ」と言い始めている。偶然、私は福祉の分野で同じことを考えていた。ここに、何がダメで、どうやれば救えると考えられるのかをかいつまんて紹介するので、興味があるテーマについては本ホームページの図書資料から該当する冊子をお読みいただきたい。本研究所にお尋ねいただいても結構です。

1.人助けは世界最下位。助け合いもできない。

●本研究所で作成した「**あなたのおつき合いの流儀は？**」は、おつき合いについての質問が10項目並んでいて、自分が当てはまるか否かを○×で示してもらうものだ。自分の問題をオープンにできるかなどを問うもので、○が多いほど助け合いはできないのだが、このテストをすると、大抵の日本人はほとんどの項目に○がつく。

●英国の福祉団体が世界各国で行っている「この1か月間に見知らぬ誰かを助けたか？」という調査においても、日本は最下位で定着してしまった。人助けができないのだ。

●その日本人で人助けをしているのは**世話焼きさん**。天性の資質の人で、支え合いマップ作りで見えてくる。前述の英国の「人を助けたか」という調査でハイと答えたのは約1割で、おそらくこの人が世話焼きさんだろう。虐待を受けている人がコンビニで保護されたといった事例は大抵、そこに世話焼きの店員がいたからだ。日本人全員がやさしくなることを期待するよりも、それぞれの店や機関がそういう人を従業員から探して店頭や窓口に配置すればいい。ところが日本人は世話焼きさんの存在とその力量を知らない。資格や肩書を持った人でないと信頼しないのだ。

2.欧米の人間信頼の風土、日本の人間不信の風土

●**障害は才能だった。ワルもまた…**。天井のシミが気になる自閉症の人が、印刷所では印刷ミスや紙の裏表を瞬時に見分ける特殊技能を持つ人になっている。細部が気になる自閉症の青年たちが、イスラエル軍の情報部隊で衛星写真の分析官として大活躍している。アメリカでは元受刑者たちが麻薬の売買など裏社会で発揮した能力を見込み、ビジネスの専門家たちの支援で起業させることで大きな利益を生み出している。

●アメリカの**ヘルパーセラピー**の発想。タバコをやめられない人に、他の「やめられない人」に意見する役を与えると、その人自身に禁煙の効果が出るという。つまり人を助ける役割を果たすと、その人に治療効果が表れるのだ。

●欧米には**フェアネス**の発想もある。ハンディキャップのある人にはそれ相当のハンデを付けてあげるのだ。一方で、日本人が好きなのは一律平等。日本人には福祉は通じない？

3.文明としての福祉とライフスタイルとしての福祉

●今の福祉が文明の影響を受けていることが、福祉の健全な発展を阻害している。文明は、心地よさを追究する。このこと自体はいいとして、これを福祉にも適用してしまった。心地良さ、つまり簡便、即効、効率、手っ取り早いなど。**担い手と受け手をまず峻別し、さらに対象者を障害や要援護度で分けて、集めて、一律のサービスを提供**する。虐待がなくなるのもそのせいだ。この方針が変わらないかぎり現行の福祉は人間の尊厳の危機を孕みつつける。

●文明は何事も分別していく。文化は、福祉と一般社会の営みを分けない、あくまで社会生活の中で、そうと知らずにやってしまう。文明の営みに対してこちらは文化的営み。**ライフスタイルとしての福祉**だ。知人が銭湯に行ったら、客の服を畳んで

いる高齢女性がいる。番台のおばさんによると、認知症で服を畳むと気が休まるらしく、いつも来ているので、あなたも畳ませてあげなさいと言う。見方によっては、銭湯がデイサービスセンター、番台のおばさんがスタッフ、客が畳ませてあげボランティア。費用はゼロ。施設は銭湯そのもの。しかも本人にとっては最良のサービスメニュー。現場には福祉の痕跡がどこにもない。これが住民流の本質だ。

4. 「思いやり」から「助けられ上手」へ〈担い手から受け手へ主役転換〉

●福祉のまちづくりの発想を、「思いやり」から「**助けられ上手**」へ転換しよう。前述の通り、困っている人を積極的に助ける日本人は1割程度だが、ある自治体の調査で「困っている人がいたらどうするか？」と聞いたら、大半の人は「頼まれたら助ける」と答えた。これが日本人なのだ。だから助け合いをするには、助けられ上手な当事者を増やせばいい。

●担い手だけで福祉を行うのではなく、**福祉は本来、担い手と受け手の共同作業**だ。受け手は、自分の問題解決に主体的に取り組みながら、必要な支援を求め一問題を認識し、解決策を考え、担い手を探し、依頼して、やり方を教えるなど、受け手の役割の方がより重要になる。今の福祉が元気に欠けているのは、福祉は担い手だけで行うものとされているため、当事者は受け身の姿勢で沈黙し、必要な役割を担っていないからだ。むしろ**受け手が担い手をリード**するのが正しいあり方で、見守りも、まずは当事者が**見守られ上手**になるよう促すのが担い手の役割になる。

5. 「ご近所」で、当事者による「自己福祉」

●「**ご近所**」の発見。助け合いの最良の範囲が50世帯。ご近所を第四層と位置付ける。

- ご近所での住民の興味深い活動を集め、分析したら、ほとんど当事者の自助活動だった。ならばご近所を当事者による「**自己福祉**」(推進)の場にする。集団でやるのが**自助同盟**。共通な利益を求めて連帯する。
- 当事者は、自宅の周囲に**自助エリア**を構築していた。その中に支援者等を配している。既に自己福祉をやっていた。
- 当事者の自己福祉の目的は尊厳の保持。**尊厳は自らがつくり出すものだった**。
- ご近所の助け合いを核にした小さな福祉**をめざす。当事者には小さな福祉の方が都合がいい。第三層が300世帯の自治区、そこにご近所が6個。第二層が3,000世帯の地区。そこまでを福祉のまちの1単位とする。スモールイズビューティフル。

6.分別の発想から統合の発想へ

- 「自助」を拡大解釈しよう。ただ自分の身を守るだけでなく、「他者の支援を得ながら」身を守ること、と変更する。さらに、自分の身を守るためにこそ、自分も他者を助ける。
- すべての行為を統合的に考える**あり方を発見。例えば、自分が抱えている問題を解決することから発展して、もっと豊かに生きることまでを包含した用語にする。「問題解決」と「もっと豊かに」はグラデーションになっている。豊かさを測定する**豊かさダイヤグラム**を開発したが、これを使って豊かさ満開と当面の問題対処を一体的に考える。
- ご近所の当事者有志が同盟を結び、公共サービスを共同で受け取って、当事者1人ひとりが利用しやすい形にする。これで**公助と自助が統合**。
- 引きこもりなどの難問のケースでも、所在するご近所で公助の派遣職員と自助同盟が、当人の立場から対策を講じる。これも公助と自助の統合と言える。